

---

# **森の噂の極悪 ドラゴンと山にトリップした三十路の私とそんな私の家来達**

ティシー

---

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タ  
テ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。  
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または  
は「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒ  
ナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範  
囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致し  
ます。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

森の噂の極悪ドラゴンと山にトリップした三十路の私とそんな私  
の家来達

### 【Zコード】

Z1807V

### 【作者名】

ティシー

### 【あらすじ】

山にトリップした私はその瞬間に山の女王になった。家来達をふ  
んだんに使用し、快適なトリップ生活を送っていた私だが、突  
然山の女王兼ドラゴンの妻となる。

(前書き)

初投稿一周年記念作品です。ちょっと過ぎましたが（笑）

「」の山にトリップして半年。

未だにこの世界のことをあまり知らない。」の山の名すら知らない。私はトリップ山と呼んでるけど、きっとそれは私だけ。少し離れた所に頂上だけ見える森には、極悪ドラゴンが住んでいると家来が教えてくれたが、海を挟んで「」に行くことはないだろう。

私が「」の世界に興味を持たない理由は一つ。別に知りずとも日々快適な生活が送られているからだ。

そうだ、べべ別に三十路過ぎたからって快適な生活を送ってればいいんだ！ どうせ一生独身なんだあ！

「姐さん！ 今朝はこんなにいいモノが取れましたぜー。」

「」苦勞

朝食を持つてきた家来に遠い田をしたまま即答すると、前に手を伸ばす。

それに合わせて食べ物が渡されると、それをそのまま口に運ぶ。

「うん、美味しい」

採れたばかりの新鮮な果実は、口の中だと汁がとけ自然と馴染む。

「」の山はおいしい食材がたくさんある。

トリップ前もそれなりに充実した日々を送っていたが、一つだけ足りないものがあった。

「ふつ……恋人さ」  
「何がです姐さん？」

私の悲しい独り言に、純粋な瞳でツツコツを入れる家来を華麗にスルーする。

とにかく、世間では、リア充、なる言葉が流行っていたようだが私には程遠かつた。

恋人を抜きにしてもいいと言つならばリア充だったのだが、如何せん世間はそれを許さなかつた。

どんどん後輩達が結婚して行くのを尻目に私はどんどん年齢だけを重ねて行く。

後輩達の幸せそうな顔を見る度、呪つてやろうかと密かに思つていたことは実家で飼つていた犬のタロー（雑種犬）との秘密だ。

『ええ？ 佐藤さん（私の名字）って結婚してなかつたんですかあ？』

とわざとらしく驚いた顔をして尋ねてくる後輩を殴つてやろうかと思つたのも雑種犬のタロー（今はミックス犬と言つりしき）との秘密だ。

『佐藤さんって綺麗だしい若く見えますよねえ。三十歳だなんて信じられない！ あ、そういうえば佐藤さんて、なんで結婚しないんですねかあ？？』

なんて聞かれた日にゃ殺意すら覚えたが、それもミックス犬のタ

口一（呼び方を変更する理由はどういってもあつたんだろつか）との秘密だ。  
まあ最終的には私の……

『くすり。若いアナタにはまだ分からぬと思つわ』

という意味有り氣だが全く無い負け犬の遠吠えで終わつた。  
敗北感に溢れたその夜、実家に帰つてタローに愚痴つたのは言うまでもない。

「いいのよ！ 恋人なんていなくたつて立派に生きていくるんだからー！」

「姐さん、手……」

握つっていた果物がグシャツと音を立てる。

「あら、失礼」

「口つと笑うと、家来も引きつった笑顔を浮かべた。

今もし元の世界に帰つたら、きっと会社の皆は驚くだろ。なにがつて、私の肌のピカピカさに。なんてつたつて口口は山。

空気は澄んでいて、ぶつちやけやることないから規則正しい生活に、毎日家来のマッサージで肌は絶好調。

さらに自由に叫んだり、やつあたりしたり、言つ事はすべてこなす家来がいればストレスも溜まらない。

「姐さん、そろそろ朝の散歩に行きますか？」  
「そうねえ」

朝の日課にしている散歩。と言つても家来に乗つて山を周るのだ

けど。

「では、皆を呼びます」

その言葉に無言の肯定を示した私を見て、家来は空に向かって高らかと吼える。

「ルオオオオオオオオオオ」

すると少しの間を置いて、いたる所から返事が返ってくる。

「　「　「ウオオオオオオオオオン」」」

そしてあつとこう間に集まつた色んな種の家来達。数は数百匹。その筆頭であるジロー（私が命名）はオオカミに似ているがオオカミより数倍大きいサイズの獣だ。

名前の由来は言わずとも分かつていただきたい。

似ていてもジローの頭には角があり、さらにサイズの変更と一足歩行が出来るという端から見ると笑える特技まで持つている。

その他にも違つ点は多々あるのだが、総評でオオカミに似ているということにしておる。

今のジローは大型犬サイズで、一本の尾が忙しなく揺れている。屈んだジローに跨ると、ジローはゆっくりと歩き出す。

ジローのツサフサの白い毛といい、ものけ姫になつた気分だ。

「姉さん今日の気分はどうですか？」

「うん、上々」

段々駆けていくジローの後を、多くの家来達が一斉に着いてくる。この光景を私が作っているのかと思つと、やうやあテンションも上がる。

ジローは私がトリップしてくるまでの山の主だったたらしく、頭も利口で言葉も話せる。

何故日本語が通じるのかは謎だが、そこらへんは気にしないことにする。

他に話せるのは数匹いるが、彼らもこの山ドトップクラスの実力らしい。と言つてもこの山でというだけで、世界的に見るとそれぐらいのかはここにいる限り分かりよつがないのだが。

そしてそんな彼らの頂点に立つ私はと言うと、特に何の能力もない。はつきり言つて彼らが私に従つてゐる理由が不明だ。

で、何故私がジロー以下含めこの山を統べる女王になつてゐるのかだが、この話は後輩云々まで遡る。

その月は仕事が波のように押し寄せ、そんな中後輩達が立て続けに結婚やら妊娠したやら幸せ臭を撒き散らし、あげく一番結婚はないと言っていたさつちゃん（私じゃないもう一人の佐藤さんあだ名）にまで年上の彼氏が出来るという暴挙。そしてアドメは会社の帰りに呼び止められ……

『佐藤さん彼氏出来たらしいですね！ どんな彼なんですか？ 年は～？ あ、いつ結婚予定ですか？ その時は私も呼んでくださいねえ！』

なんていう私じやない佐藤だと知つていながら、私につつかつてくる後輩の言葉にイライラは頂点に達した。

絶対零度の微笑みを見せるとツカツカと家に帰り、荒々しくドアを閉め、防音室へに入る。

淡々と服を脱ぎながら上下下着姿になると、ふつと息を吐き、そして目一杯吸う。

人生最大の雄叫びを上げた瞬間、私は身も心もトリップした。驚きの肺活量をしているらしき私はトリップ後も叫び続けたらしく、気付くとジローが目の前で頭を垂れていた。

「姉さん、一生着いて行きます！――」

卷之三

よくわからないが、その時から私は「この女王である。

後から話を聞いてみると、どうもジローが山の主としての雄叫びを上げている最中に、その声に被さるよつに私と私の声がトリップしたみたいだ。

その時私が声と共に発していた気がどうとかいつとか言つていた  
が、それもあまり理解していない。というか興味がなかつたからジ  
ローの興奮している声も右から左だつた。

「ジロー」

「はい姉さん！」

私がジローの名前を呼ぶと、すぐジローは嬉しそうだ。

「帰つたらマッサージしてね」

「もちろんですー。」

うん、いい家来だ。

その後も流れる景色を見ながら（あまり変わらない景色だけど）、山の空気を全身に浴びる。

「キモチー」

ジローの今の速度は、絶叫系が苦手な人にはお勧めできない速さだ。

さらりと揺れも当然ながらにあるのだが、それは慣れとジローの毛のフワフワ感が忘れさせる。

寝る時もこのフワフワを存分に活用している。ジローの胴体を枕に、一本の尾を掛布団にして快適な夜を送つてこる。

私の体内計算で30分が過ぎた頃、ジローが速度を緩める。

「そろそろ戻ります?」

「うん」

そう言つと、ジローがまた吼える。そしてロターンすると、家来達が脇に並び、帰り道を開けていた。

「」の乗っているだけという作業は簡単そうで案外疲れる。

最初の方はよく筋肉痛に悩まされたものだ。あと数回すべり落ちて、ジローが半泣きだったこともあった。

家来の一人が擦りキズを一瞬で治してくれたが。

そんなこんなですっかり慣れた今は、手放しでも乗つてられる。途中川に寄りながら帰つて来ると、ジロー以外の家来達は帰つて行つた。

「姐さん、マッサージ始めますね」

「ありがとう」

地べた（と言つても色んな毛皮が引いてあるが）に寝そべると、ジローが器用に背中のシボを押し始める。

「ん~」

その気持ち良さにウトウトし始めた頃、ソレは起ついた。

「グルルルル」

突然唸りだしたジローにびっくりして、起き上がる。

「ん？ ジロー？ どしたの？」

「姐さん！ 何かが起きてるー。離れないでー。」

ジローが元のサイズに戻り、私にピッタリ寄り添う。いつの間にか、周りには家来達が集結していた。

そしてしばりへすみると、"ガ" "ガ" "ガ" とこづいて音が地面の揺れと共に鳴り始めた。

「何？ すごい、揺れ……！」

ジローに必死に捕まつてその揺れに耐えるが、立っていられない程だった。

「地殻変動がもしません。数百年に一度起じると言われてますからまさか今とは！」

数百年に一度!? どんな確率だよ! いやでも、トリップした  
時点アレか。私つてもしかして奇跡の女?

卷之三

モナコ

揺られながら話すと田を躊躇みそうだ。

しかしあまりに長い揺れにイライラして……

「まーだーかああああああああああああー！ー..」

と、トリップした時程ではないが、雄叫びを上げると揺れが激しくなった。

גִּבְעָן

大きな物体同士がぶつかりあつた音が響くと、一番激しい揺れが

起こり、私は気を失つた。

「……さん！ 姐さん！！」

「…………んあ？」

何とも間抜けな声で起きた私は、むくつと起き上がる。

「姐さん、大丈夫ですか？」

ジローの心配そうな声を無視して周りを見渡す。

「どうなつたの？」

「どうやら、離れていた山と森が衝突したようです」

ああ、地殻変動でね。 つて

「森つて極悪ドラゴンがいるとか言つてなかつた？」

「ええ。 でも大丈夫です。 姐さんは俺達が守ります」

キラッ キラと輝く青の瞳でジローはキメてくれたが、若干不安は残る。

グオオオオオオオオ

とそこへ森から物凄い咆哮が響き渡り、今まで崖だつた場所にくつづいた森の木々がバキバキと倒れて行く。

「オオオウウ！ グルルニア」

なんだが痛そうな声でフラフラと森を破壊してこちりへやつて来たのは、恐らく尊のドラゴン。

極悪だか何だか知らないが、今の姿は顔を抑えて悶えているというなんとも可愛い姿だ。しかし体高は首が痛くなるほど高い。

「我が君！ お待ちください！ そちらは敵地です……」

「グルルル…………ん？」

リザーティマンのような獣が叫ぶと、ドラゴンは足を止めて、初めてこちらを見る。漆黒の身体に金色の瞳が綺麗だった。

「ど二だ、こ二せ…………」

「ですから敵地です！ 引き返してくださいー！」

「ほお……。先程の揺れはこの者達が起こしたのか？」「それは違うかと」

そんな相手のやり取りの間に、ジローが前に出て行く。

「ルルルルル

低く唸りながらジローが進むと、それに合わせて他の家来達も戦闘態勢に入ったようだった。

それを見たドランの家来達もドランの前に出る。そのままだ  
と、間違いなく戦闘が始まってしまう！

「待つてジローーーー！」

駆け出してジローの前に立ちはだかる。

「姐さん！？」  
「危険です！」「早くどいてください！」

待つて 大丈夫 あのトニーはなんとも語がわからね 間違ひ

「失敗してから！？ そんな」としたら姉さんはどうなるー？」

「うう……しかし」

いいから！」

なんて会話を続けていたら後ろで低く笑う声がした。

「おのれの声で振り向くと、わいをぬらぬらぐなり、2メートル程になつたダブルゴンがいた。

卷之三

支娘

久しぶりに聞いた。

でもやつは少説は通じるが、なんでも力で解決すればいいってわけじゃないからね！

とりあえず、友好関係を築く（気はないけど）にせまざと前から。  
ということで内心びくびくしながらも、しつかりとドリゴンの瞳  
を見つめて口を開く。

「……名前は？」

「我が名か？ まだない」

「へえ……。じゃあ付けようか？」

それは軽いノリだつた。

ネーミングセンスなら任せてくれ。順番的にいくと次はサブロー  
だがどうじょうか。

「おまえがか？ いきなりだな。くくく、よからい。我が名を呼  
んでみよ」

周囲がざわつき、ジローが何か言つていたが真剣に名前を考えて  
いた私は、ジローに適当に頷いて聞いていなかつた。

「んつと……サブ……いや【シルフア】でー」

やつぱりサブローはマズイと思ふことに浮かんだ、昔ゲームで  
お気に入りだつた金髪のキャラの名前を叫んだ。

「ふ、よからい。ではおまえは……」

シルフアで通つたよー ていつかそうだ、自己紹介忘れた！

「私は里<sup>セト</sup>ー！」

ふふふ、私はフルネームにすると 佐藤<sup>さとう</sup>里<sup>セト</sup>。小中高とあだ名は  
サトサト。

一度親に文句を言つたことがある。なんで、佐藤の後に、さとな  
のか。なぜ同じ響きにしてしまつたのか。  
すると一言。

『いいじゃない。結婚したら名字も変わるわー。』

だと。しかし結婚せぬまま、未だサトサトである。  
そう由傷氣味に笑つていたら、アリーナンが言葉を発す。

「……サト。すでに名を持つのか？ それなのに我と？」

不思議そうで少し驚いたような金の瞳が私を映す。ビシリへんが  
不思議なのか」二つちが不思議だ。

「……まあいい。たとえ魔界の主が相手であろうと、私は譲らん。  
サト、覚悟せよ」

何を言つているのかさっぱりだが、とりあえずオーケーしといた。  
逆らわないのが吉だろつ。この場は適当に乗り切つて明日からは  
会わないよう普段の場所を移動しよつ。

なんて考えは甘かつた。

「こちらに來い。我が寝床を紹介しよう

寝床オー!? 別に興味ないからー

「いや……その、今日はちよつと遠慮して明日でいいかな、な  
んで」「何故遠慮する?」「ええっと、ほら、いきなりだと悪いし、あの揺れでしょ? 疲れ  
ちゃつて……」「だから我が家側で休めばよー」

はい！？ 何が悲しくてあなたの側で眠れと…

「ふむ……まあよい。準備も必要であろう。明日にじよひ」

何の準備だ。でもこれで見逃してもらえそう。

「ではサト、明日の朝会おう」

そう良い残し、ドラゴン シエルファが森に帰つて行くと、倒れた木々が元通りになつた。

「姐さん、本当にいいんですか？」

「大丈夫、だから他の場所に避難しよう

「え？」

「ほり早くー！」

この時の私は、ジローの言葉の意味を理解していなかつた。

私とジローは広い山を駆け抜け、頂上付近から中間地点まで降りると、見つけた洞窟を新しい寝床とした。

ジローが何か言いたそうにこちらをみているが、ここに来るまでに疲れ、さらに夜になつていたことで眠ってしまった。

「おやすみ、ジロー」

「ウルル……」

そして翌日。

「姐さん！」

「う……ん。ふあ、おはようジロー」

「姐さん、奴が近づいてますよー」

「ふえ？」

まだ寝ぼけている思考ははつきりしない。

奴？ 近づいて……

「でえ！？ シェルファの事！？」

「そ、そうです。探し当たみたいです。もうすぐ近くまで来てます」

す

これは面倒な事になった。

……と、思っていたのもシェルファが姿を見せるまでだった。  
人間とは薄情なもので、結局イケメンには弱いのだ。（え？ 私だけ？ いやいや）

洞窟をあつさり見つけたシェルファは、昨日とは違つ姿を見せた。

「どうだ？ サトの姿を真似てみた」

グッジョブ！

「、これは……今まで面白いなりにそれなりの人と恋愛してきたが、シェルファの今の姿はそんな人達は足元にも及ばない。

黒髪に金色の瞳。190くらいの身長に切れ目。しかしその目は

「ジローが女を宿して私を見る。

「ああ来い。今日は逃がさんぞ」

見惚れていた私は返事をしなかつた。が、シェルファが不意に近づいてくる。

「サトから来ないなら……連れ去るまでだ」

そう言って私を抱き上げる。ってちよちよちよ恥ずかしい……お姫様抱っこは恥ずかしい……三十路だから……もう若くないから……

「ジロー」

助けて、そんな願いを込めて放つた言葉にジローは

「ジローマでもお供します」

見当違いの言葉を返してくれた。

あの時、ジローや他の家来が何を騒いでいたのか。

そう……

ドラゴンはつがいとなる者が、相手の名を決めるのだと知ったのは、もう少し先の話だ。

そして、私の名前が決まっている=既に相手がいる と勘違いしているシェルファが、まだ見ぬ相手に秘かに闘志を燃やしていると知ったのも、先の話。



(後書き)

読んでいただきありがとうございました。

なんと初投稿から一年が経過してしまいました。

あの時はまだ高校生で夏休みの暇つぶしにと始めましたが、一瞬ま  
で続くとは。

これも皆様のおかげです。ありがとうございます。

これからも応援よろしくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1807v/>

---

森の噂の極悪ドラゴンと山にトリップした三十路の私とそんな私の家来達

2011年7月26日11時30分発行